

京都市レジリエンス戦略

～しなやかに強く、
持続可能な魅力あふれる京都のために～



「100のレジリエント・シティ」

京都市は、平成28年（2016年）5月に、アメリカの慈善事業団体ロックフェラー財団の提唱による「100のレジリエント・シティ」プロジェクトに参加する世界100都市の1つに選定され、これを機に「京都市レジリエンス戦略」の策定に取り組んできました。

※「レジリエンス」という言葉が持つ意味は、一つだけではありません。

そのため、本戦略に副題を付けていますが、本戦略をお目通しいただき、あなたにとっての「レジリエンス」、あなたにとっての副題を考えてみませんか。

「自分ごと」「みんなごと」のレジリエンス元年に！



京都市長
門川 大作

平安建都以来、千年を超えて豊かな文化が脈々と継承され、世界の人々を魅了し続けてきた京都のまち。しかし、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。

幾度となく大きな自然災害や疫病、戦乱などを経験しながらも、その度にそれを乗り越えて輝き続けてきたのです。

例えば明治初期には、維新で都の地位を事実上失い、人口が激減するなど都市存亡の危機に見舞われましたが、先人たちは伝統の上に新たな技術を取り入れて産業を振興させるなど、先進的な取組に次々と挑戦し、今日の京都の発展の礎を築きました。このように、あらゆる危機にしなやかに対応し、同時に新しい風を取り入れて更に発展しようという考え方が「レジリエンス」です。

今、京都のまちは頻発する自然災害や、少子高齢化に伴う経済・子育て・地域コミュニティ等あらゆる現場での担い手不足など、様々な課題に直面しています。今こそ、京都のまちに受け継がれてきた「レジリエンス」の力を磨き上げてこれらの困難を克服し、未来を切り拓いていかなければなりません。

そうした確たる思いの下、この度、アメリカの慈善団体であるロックフェラー財団の「100のレジリエント・シティ」プロジェクトに参加する世界100都市の1都市に選ばれ、その御支援の下に、市民ぐるみで議論を重ね、今後の取組の指針となる「京都市レジリエンス戦略」を策定しました。3年に及ぶこの道のりは、「誰一人取り残さない」を理念に、持続可能な社会の実現に向けて、国連が「SDGs」を目標として掲げてからの年月と重なっております。この間、京都は様々な試練に見舞われましたが、例えば、昨年襲った多くの自然災害においても、尊い人命が失われなかったことは、京都の「レジリエンス」の源泉である「地域力」「市民力」の発揮によるものと考えます。そうした力がSDGsの達成の支えとなり、全国的にも高い評価も受けるに至りましたが、先行き不透明な将来に向けて、ここからが「レジリエンス」の新たな時代のスタートであります。

この戦略に基づき、京都に暮らし、集い、活動される皆様一人ひとりが「自分ごと」「みんなごと」として取り組むことで、磨き抜かれた「レジリエンス」が、持続可能な京都のまちを未来に向けて発展させていく。そして、それが京都ならではのSDGsの達成につながっていく。私はそう確信しています。本年を、そのためのスタートの年「レジリエンス元年」と位置付け、共に力を尽くしてまいりましょう。

結びに、本戦略の策定に当たり、貴重な御意見や御提案をお寄せくださいました全ての皆様に心から御礼申し上げます。

「レジリエント・シティ」……これまで聞き慣れなかった言葉が、20年後、50年後、どのように引き継がれていくのか、率直なところ、ワクワク感と不安感が入り交っています。

「戦略」という文書は出来上がりましたが、京都市のまちづくりに真に役立てられるかどうかは、行政を含め、あらゆる分野、立場、世代の市民・団体・組織の皆さんが、当事者として、考え、行動し、新たなライフスタイルを創造していただけるか否かにかかっており、そうした皆さんの御理解を深めていただくため、私からのメッセージも数箇所盛り込んでいます。併せて御参照いただければ幸いです。

レジリエント・シティ京都市統括監(CRO)

藤田 裕之

2019年の私へ、2040年の私から

元気ですか？ ……と聞くのも変ですね。

あなたが今、自分やこのまちの未来に、希望と共に様々な不安をいだきながらも元気に過ごしていることを、私は知っています。実は私は、あなたがこのレジリエンス戦略に挟まれた手紙を読んでいる2019年から21年後、戦略の目標年次である2040年の“あなた”です。

私は今も京都に住んでいます。「なあ～んや！」って思うのでしょうか。もちろん行動的だったあなたは、あれから東京や外国にも行き、いろんなまちを見てきました。でも、やっぱり住むなら京都、このまちが一番と実感しています。

京都のまちはどうなっているかって？ 京都は今も、鴨川や桂川などの流れが清らかで、歴史的な町並みや自然景観の中で春の桜も秋の紅葉も変わらずきれいです。暑い盛りの祇園祭も、山鉦の若い曳き手が少しずつ増え、多くの人々を魅了しています。そう、京都は美しく活気ある世界の京都であり続けています。

この21年の間には、自然災害の危機も度々ありました。去年も、あなたの時代に現れ始めた「メガ台風」が発生。とんでもない暴風と豪雨に、家や建物が損壊し、バスや鉄道も全面ストップ。まちなかの川も氾濫寸前……。今はAIの活用等で危機管理システムがかなり発達しましたが、それでも自然の力は時として予測を超え、みんな「大丈夫やろか」と気が気ではありませんでした。

でも、子どもや高齢者、京都を訪れていた観光客まで、全ての人のいのちを守り、被害を最小限にとどめ、いち早い復旧を果たした京都。その最大の力になったのは、システムなど文明の利器よりも、地域の絆の力、市民の助け合いの力と、それを支える様々な団体、企業、大学、行政など、まちぐるみの連携の力でした。

私も、一人暮らしのお年寄りの避難を助けたり、言葉が通じず体調も崩して不安を募らせていた外国人観光客を救護したり。……地域の消防団に入り、多くの若者や女性団員たちと共に活動している未来を、あなたはまだ知らないでしょうけど。

あなたの時代には人口減少の危機も深刻で、これからの社会がどうなるのか大きな不安でしたね。私の時代でも、災害や人口減少、経済、景観や空き家、地域コミュニティ、地球温暖化など、様々な問題が全て解決した訳ではありません。

でも、これらを、ひとつごとではなく“自分ごと、みんなごと”として、私たち市民や地域と行政が協働する様々な取組が、確実に実を結んできています。

この戦略に書かれた“50年後、100年後、1000年後も輝かしく持続・発展する京都の未来”に、私たちはあなたよりも少しだけ自信と確信を持っています。

そして、その未来の実現に向けてスタートを切るのは、21年後の私たちではなく、今のあなたたちだということを知っておいてください。

そうそう、うちのお隣さんも、“レジリエント・シティ京都”の評判を聞いて数年前に東京から移住してきて、今度、もう1人赤ちゃんが産まれる予定とか。また、地域が子どもたちの声でにぎやかになりそうです。

では、未来から期待を込めて！

はじめに

レジリエンスとは

「レジリエンス」という言葉は、もともと、物体が元に戻ろうとする力を意味し、心理学や生態学で主に用いられていましたが、2001年のニューヨークでの9.11同時テロにおいて、復興に向けた合言葉として用いられたことから、災害や危機への対応において、広く使用されるようになりました。

特に、平成23年（2011年）に我が国で発生した東日本大震災が契機となって関心が高まり、今日、様々な危機や課題に対処するうえで、世界共通のキーワードの一つとなっています。

この言葉は、一般的に、様々な危機からの「回復力、復元力、強靱性（しなやかな強さ）」を意味するとともに、ダメージを受けても粘り強くしなやかに元に戻りながら、以前よりもより良く立ち直る状態を表現しています。

例えば、「私たちが何か困難に直面し、心が折れそうになっても、乗り越える力」や「自然環境が一度損なわれても、生態系が根絶やしにならず、また元に戻る力」などの例えが分かりやすいでしょうし、身近な諺では、「雨降って、地固まる」、「災い転じて、福となす」といった表現が当てはまります。

都市に関しては、「悪影響を及ぼす外からの力や、内部で生じる様々な困難な問題に、屈することなく粘り強く対処し、克服し、より良く発展する能力」が、「レジリエンス」なのです。

そこで、あらゆる危機を乗り越え、将来にわたって人々がいきいきと暮らせる、魅力と活気に満ちたまちを目指して、レジリエンスの理念を政策に反映し、実行していくための取組指針として「京都市レジリエンス戦略」を策定するものです。

都市をおびやかす「危機」について

都市をおびやかす様々な危機には、大きく分けて、次の2つがあります。

- （突発的なショック）…地震や台風、豪雨・暴風等の自然災害、テロ、サイバー攻撃、大規模な事故、伝染病のまん延、経済危機など、外因的な目に見える危機
- （慢性的なストレス）…人口減少や少子高齢化、地域コミュニティの活力の低下、インフラの老朽化など、都市の内部で進行する目に見えにくい危機

いずれも、都市の基本的な機能や安心安全な暮らしを損ない、都市が存続してその都市に人々が暮らし続けることを、不可能にしてしまうおそれがあります。

第1章 レジリエンス戦略について

1 レジリエンス戦略の目的

“あらゆる危機を乗り越え、20年、50年、更には100年、1000年後も、京都が京都であり続ける”

自然災害や人口減少などの様々な危機に対し、粘り強くしなやかに対応し、将来にわたって人々がいきいきと暮らせる、魅力と活気に満ちた京都であり続けることを目指します。

京都が魅力あるまちであり続けるために、
今何が必要なのでしょう？

策定の背景

- 京都は、千年以上、幾多の危機を乗り越え、持続・創造・発展してきた、レジリエンスを内に備えたまちでした。
- しかし、今日、大規模自然災害や人口減少等、都市の持続に関わる深刻な問題に直面しており、改めて今、どのようなことが起きても対応・適応できる能力、すなわち京都のレジリエンスを再点検し、磨き直すことが課題となっていると言えます。

2 レジリエント・シティ実現のための手段

①～⑤のレジリエンスの視点
で行政として取組を進めます

(1) レジリエンスの視点によって政策を点検・強化

① 行政分野を超えた政策の融合

様々な分野の政策について、「レジリエンス」の視点で横串を刺し、一つの施策・事業が、危機への対応に向けた多様な効果を得られ、また、無駄なく効率的に推進するために、分野横断的に融合を図るよう、既存の取組等について点検・見直しを行う。

② 市民、地域、企業、大学、NPO等との協働

行政の自己完結型の施策対応ではなく、幅広い市民や地域団体をはじめ、企業、大学、NPO等と、危機への対応に向けた当事者意識を共有し、相互に連携・協力・協働できる仕組みを平素から確立する。

③ イノベーション(前例の打破、変革)

社会状況の著しい変化のもと、今や前例主義が通用しない時代に直面していることを認識し、これまでの手段や経験にとらわれず、政策の融合や市民等との協働を進めつつ、大胆に変革に挑戦する。

④ 「想定外」の克服

予測困難な危機に対して幅広く構えて、余裕を持っておくことで、想定外の危機が発生した

場合でも、粘り強く、柔軟で、臨機応変な対応が可能な仕組みを構築しておく。

⑤ **ピンチをチャンスに変える発想の転換**

先行き不透明な社会に対し、悲観のみするのではなく、粘り強く努力すれば必ず前途は拓けるといふ楽観主義や未来思考を共有することによって、逆境に陥ってもそれを逆手にとって発展に繋げる方法を常に考える。

CROからのメッセージ 防災・減災と自然との関わり

災害への備えにおいて一般に用いられる言葉は「防災」ですが、自然災害に限って言えば、発生そのものを防ぐことは、人間が自然の支配者でない限り不可能です。

その意味では、自然災害に対しては、災害への「防災」より、災害が起こっても被害を少なくする「減災」という表現の方が理解しやすいかもしれません。

①～⑤の取組を市民の皆様との協働で進めます

(2) **京都が誇る「地域力」、「市民力」の更なる強化**

① **レジリエンスの理念の共有**

「レジリエンス」を、社会共通の合言葉として広げ、その理念が、市民生活や活動の中に浸透した状態を目指す。

② **地域の絆の強化**

将来にわたって誰もがいきいきと暮らせる地域をつくるため、京都ならではの学区コミュニティを基盤に、各種団体の連携を一層深め、地域で暮らす人と人のつながりや支え合いを育む。

③ **多様な力（企業、大学、NPO等）との連携**

様々な状況の変化や危機に対して、企業や大学、NPO等が地域社会とも積極的に連携し、主体的に行動できる仕組みづくりを更に進める。

④ **市民一人一人の価値観やライフスタイル、働き方の転換**

市民一人一人がレジリエンスの理念の下で、価値観やライフスタイルを見直すとともに、行政や地域、企業、大学など、社会のあらゆる場で、働き方の転換を含め、レジリエンスのあるライフスタイルを目指す。

⑤ **レジリエント・シティの担い手の育成**

レジリエンスのある社会を持続するためには、次の世代においてもレジリエンスを実践し、担う人々が育つことが不可欠であり、市民をはじめ、全ての団体や組織が、当事者として、レジリエンスを実践する気運を高める。

コラム 「個人・家庭」や「地域・企業等」のレジリエンスの取組例

レジリエント・シティの実現には、最小単位としての「個人・家庭」や、それを取り巻く「地域・企業等」のレジリエンスがあるかどうかが大きく関わっています。

そして、都市のレジリエンスは、周囲の自然、ひいては地球環境にも大きな影響を及ぼし、また大きな影響を受けていることから、環境への負荷を減らし、共生を図ることは、たいへん重要です。

(取組例)

- 食料や水を少なくとも3日分は家庭に備蓄する。
- 新しいスキルを身につけるなど自分自身を向上させる。
- 文化活動やボランティア活動などに参加する。
- ご近所とのあいさつを欠かさず、地域の行事にも参加する。
- 公園体操など、地域での健康づくりの取組を行う。
- 人と自然と地域を大切にされた企業活動を行う。



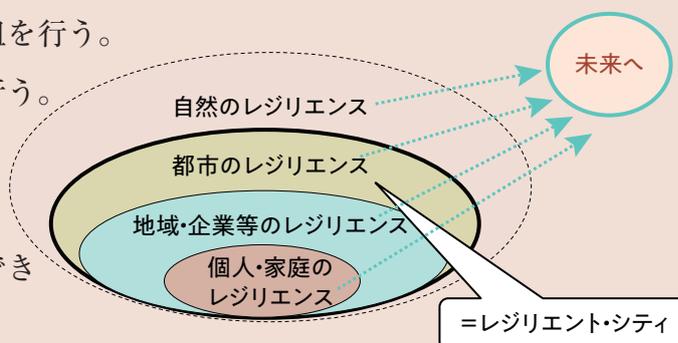
普段のちょっとした何気ない行動がレジリエンスに！

- 予測困難な様々な状況においても、生活できる術が身に着く。
- 自分自身の知恵や知識の向上が、いざという時、他の人の役に立つ。
- 日頃の活動で生まれた人のつながりが、災害時にも生き、新しい活動に発展することもある。
- 元気になった高齢者が、地域の担い手として活躍したり、更なる活動に発展したりする。
- 豊かな自然環境を守り、企業だけでなく、地域も持続・発展する。

これらはあくまでも一例です。先行き不透明な現在、「これさえやればレジリエンス」という正解はありません。危機への備えを入口として、人とのつながりや地域活動が自身にとってどのような意味を持つかを、改めて考えてみる機会にもなります。

まず、「あなたにとってのレジリエンス」を探してみてもいいのではないでしょうか。

実は、それが、まち全体のレジリエンスにつながっています。



CROからのメッセージ 区民運動会と防災訓練

各学区単位で盛大に開催される区民運動会。同じ町内で世代を越えてチームを作り、ルールを守って協力し合う素晴らしい行事ですが、目的は違っても、いざという時の備えとして意外と共通点が多いのは防災訓練ではないでしょうか。

これらの行事について、主催団体相互の連携を深め、種目や訓練の在り方について考えるのも、「レジリエンス」のきっかけになりそうです。

3 SDGs, 「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略との連携・融合

(1) 「SDGs」は、「誰一人取り残さない」を合言葉に、人権、格差是正、教育、環境、平和など、持続可能な社会の実現を国際社会全体で目指す17の普遍的なゴール(目標)と、169のターゲット(達成基準)であり、実現に向けて各国政府だけでなく、地方公共団体や企業等の主体的な取組が求められています。

あらゆる危機を克服し、「持続可能な社会の実現」を追求するという方向性において、「SDGs」と「レジリエンス」の取組は重なり合います。

SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標)

- 持続可能で、格差のない、経済、社会、環境の調和のとれた向上に向け、国際社会全体での達成を目指して、平成27年(2015年)9月に国連で採択された2030年までの目標。



ロゴは国連広報センター作成

(2) 「レジリエンス」は、本戦略では、主に課題解決に向けた思考方法や行動様式として用いており、レジリエンスの視点に基づき分野横断的に既存の取組等について点検・見直しを行うことで、SDGsの目標相互のつながりを把握し、連携を図りながら、持続可能な社会の実現に向けた取組を確実に実行していくことが、京都ならではのSDGsの達成につながります。

(3) 「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略は、全体として、人口減少の進行に歯止めをかけることに、より重心を置いていると言えますが、レジリエンス戦略では、人口減少が進行

し続けた際に、マイナスの影響を最小限にとどめ、ピンチをチャンスに転じ、危機的状況からより活力ある社会への復興・発展を図るという方向性を示すなど、「まち・ひと・しごと・こころ 京都創生」総合戦略に新たな視点を盛り込む機能を担っています。

- (4) 行政における推進体制として、平成30年(2018年)7月に、市長を本部長とする「京都創生総合戦略・レジリエンス・SDGs」推進本部を設置しており、引き続き「レジリエンスの視点を盛り込むことによって、本市のSDGs達成に向けた取組を国際的に質の高いものに練り上げる」など、政策の相乗効果を追求します。

4 取組期間

2019年度から2040年度までとします。

CROからのメッセージ レジリエンスと持続可能性

これら二つの言葉は、よく似ており、相互に結びつきつつ、究極的な目標は同じだと思います。

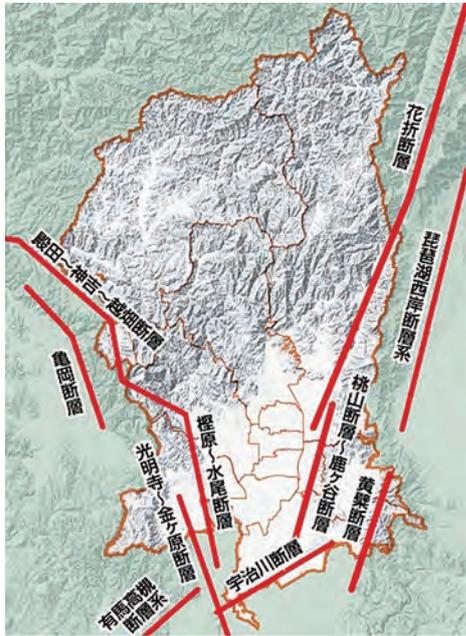
「持続可能性」は、一般に、様々なシステムが適切に維持・保全され、概ね順調に発展することを意味しますが、「レジリエンス」では、状態に浮き沈みがあることを踏まえ、仮に落ち込んでも、創造性を発揮して回復し、元の状態以上に発達、発展するという変化が前提になっています。

第2章 京都市におけるレジリエンスの課題

本市が直面している、あるいは今後発生又は深刻化し得る主な危機（レジリエンスの課題）として、以下のものが挙げられ、しかもこれらの課題は、相互に密接に関係し、影響しあっており、この課題にはこの対策、といった、一対一の対応が難しくなっています。

1 自然災害等

特に危惧される自然災害として、花折断層を震源とする直下型地震や南海トラフ地震の影響及び豪雨等による土砂災害・風水害等が想定されます。平成30年（2018年）には、大阪北部を震源とする地震（6月）により、市内で震度5強を観測したほか、7月豪雨や、台風21号など、4度にわたる台風の襲来により、被害が発生しました。



◆平成30年（2018年）台風21号による被害

戦後最大を記録する暴風による影響で、7千軒を超える家屋被害（平成30年（2018年）12月末時点）や、最大約9万軒に及ぶ停電が最長で17日間発生するなど、多くの被害が発生しました。

2 人口減少

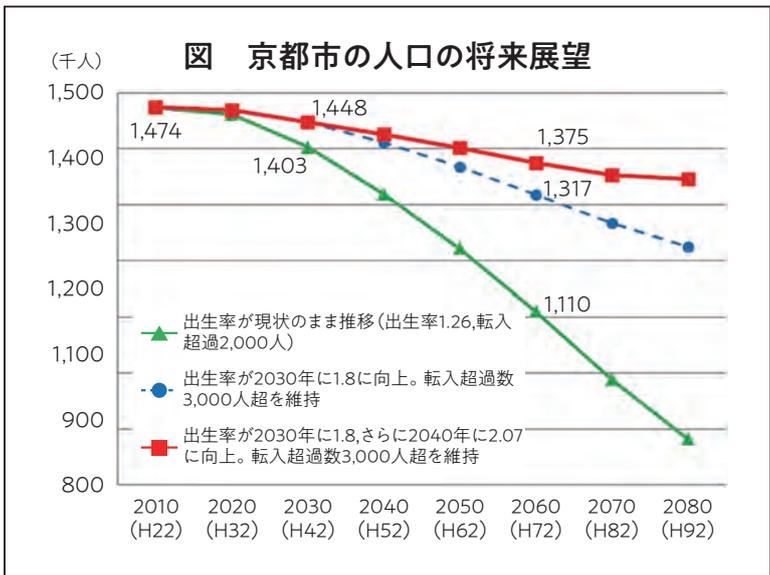
少子高齢化の影響等により、平成17年（2005年）からは、出生数を死亡数が上回る自然減が継続、拡大傾向にあります。平成23年（2011年）以降は、転入数が転出数を上回る転入超過が続いており、人口減少に一定の歯止めがかかっていますが、自然減をカバーできず、今後も中長期的に人口減少傾向は続くと思われています。

【自然動態（出生数と死亡数の差）】

平成17年 525人減
⇒ 28年 2,807人減, 29年 3,905人減,
30年 4,697人減

【社会動態（転入数と転出数の差）】

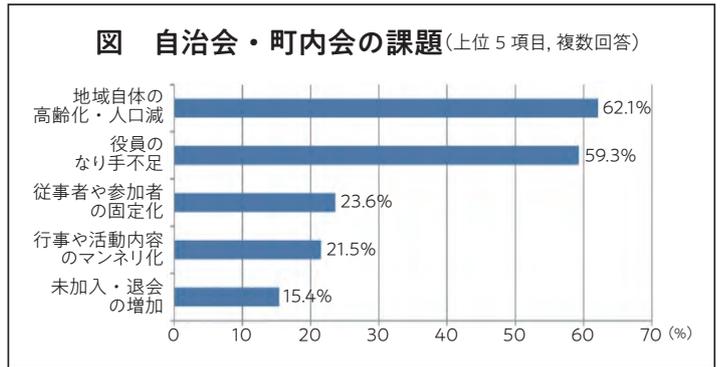
平成23年 1,071人増
⇒ 28年 3,021人増, 29年 2,022人増,
30年 2,511人増



資料：「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略

3 地域コミュニティを取り巻く課題

人口減少や少子高齢化の影響による担い手不足は、自治会・町内会に限らず、その他の地域組織にも影響し、防災や防犯、清掃・美化活動、高齢者の見守り等の福祉活動など、様々な取組の存続を危うくするものです。



資料:平成24年(2012年)度「自治会・町内会アンケート」京都市

4 文化の継承や活用に関する課題

価値観の多様化に伴う生活様式の変化や地域社会の希薄化等により、地域に根差した暮らしの文化の継承が難しくなっています。

5 京都経済の活性化に向けた課題

市内企業においては、人口減少社会の進展も相まって業種・地域を問わず人手不足が深刻化しており、特に市内事業所の99%を占める中小企業では、経営者の高齢化と後継者不在など、担い手不足の深刻度が増しています。

6 空き家など住環境の課題

空き家の増加は、防災、防犯、生活環境、景観保全、地域コミュニティの活力に悪影響を生じさせるものであり、地域の特性を踏まえた空き家対策の取組により、空き家の発生の予防、活用・流通の促進等を図るとともに、空き家問題を「自分ごと」として受け止めていただくことも必要です。

7 景観の保全・継承に関する課題

京都の町並み景観と生活文化の基盤である京町家は、年間平均で1.7%減失しており(平成28年(2016年)調査)、「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」(平成29年(2017年)11月制定)に基づき、更なる保全・継承に取り組む必要があります。

8 環境共生や脱炭素社会に向けた課題

環境負荷の低減はもとより、本市唯一の最終処分場を長く使用していくため、更なるごみ減量を進める必要があります。また、全ての生命が存続する基盤であり、安全で豊かな暮らし、文化・祭り等を支えてきた生物多様性の保全が危ぶまれています。さらに、東日本大震災以降、電気のCO₂排出係数の悪化により、温室効果ガス排出量の削減率が小幅にとどまっています。

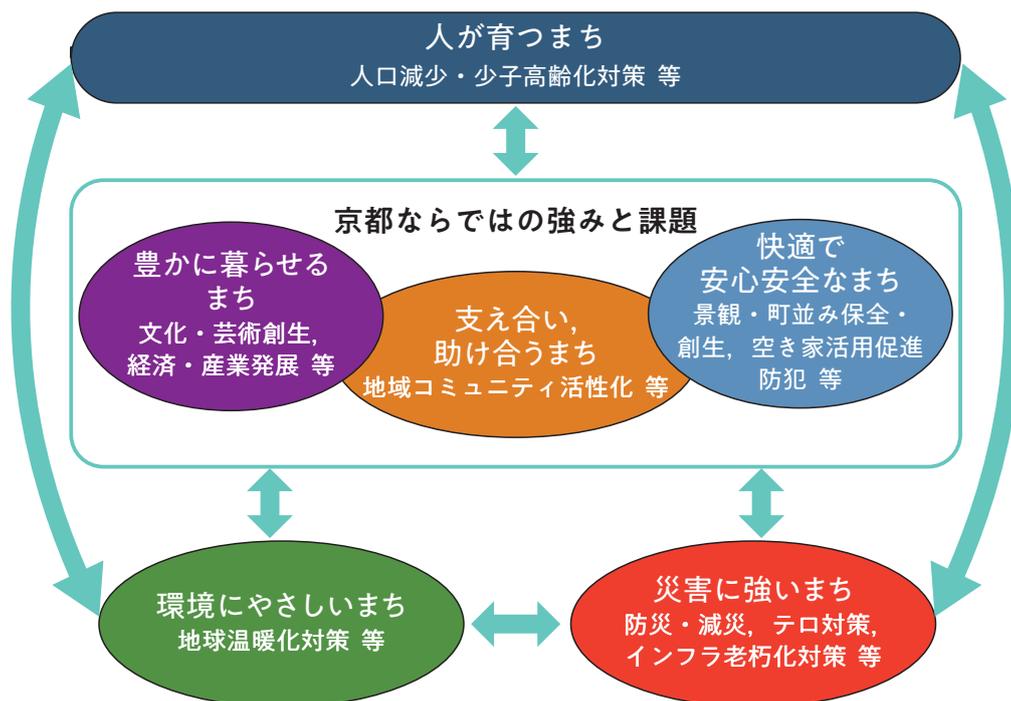
第3章 レジリエント・シティ京都の実現に向けて

1 6つの重点的取組分野

第2章の課題及び本戦略の策定過程で行ってきた市民等とのワークショップや有識者との意見交換等の議論を踏まえ、以下の6つを、レジリエント・シティ・京都の実現に向けた、重点的取組分野として設定します。これらの分野における取組が、それぞれの分野におけるレジリエンスを高め、また分野相互がつながり、支え合うことによって、分野間の隙間を埋め、危機が付け入る隙をなくしていくことを目指します。



6つの重点的取組分野の関係図



左の図は、6つの分野をフロー化したものですが、このうち、中段の3つが京都ならではの特徴を表しています。

まず、【**支え合い、助け合うまち**】の基盤となる「地域コミュニティ」は、明治2年の「番組小学校」創設時から、学校を拠点とする学区コミュニティが形成され、現在では、全ての行政区に広がり定着しています。学区よりも小さな町内単位で行われる地蔵盆や門掃きも含め、大都市圏では京都以外には殆ど見られない特色です。

【**豊かに暮らせるまち**】の基盤となるのは、「文化・芸術、産業」です。今も地域の風物詩でもある祭礼においては、様々な伝統工芸が重要な役割を果たしていますが、文化や芸術、年間を通じての催事などが、市民の暮らしに密着し、息づいていることが、大きな特徴であり、地域コミュニティの姿とも、深く関わっています。

【**快適で安心安全に暮らせるまち**】の要素である京都の「景観や町並み」は、先人から引き継いだ大切な財産であり、市内のどこからでも周囲の三山の四季の移ろいを感じられることや、寺社や京町家の歴史的な佇まいは、京都ならではの風景の一部として最大の魅力の一つです。

これら3つの分野は、京都の強みとも言えるものであり、地域コミュニティが文化芸術や景観・町並みの維持・発展を支え、また文化や景観への誇りが、地域コミュニティの結束の基盤となっています。また、これらは豊かな自然環境によって守られてきたものであり、度重なる災害を経験して今日まで引き継がれてきたものです。

また「DO YOU KYOTO？」と表現される、【**環境にやさしいまち**】は、京都が営々と引き継いできたライフスタイルでもあり、「京都議定書」発祥の地として世界に発信してきた理念でもあります。しかし、地球温暖化の影響は当面避けられないことから、それを最小限にとどめるための適応策が重要となります。

実は、京都は数々の地震、大火、洪水を経験しつつ、苦難を乗り越えてきた生活の知恵が蓄積されている都市でもあり、【**災害に強いまち**】は、まちの強みを守るうえで必須の分野であり、都市の存続において、大前提でもあります。

加えて、我が国全体の最大の課題とも言うべき人口減少は、様々な取組の担い手や後継者の不足など、既に京都にも影響を及ぼし始めており、京都の強みを根底から揺るがしかねません。そのため、【**人が育つまち**】の課題である、一人一人が生き生きと活躍できる基盤づくりは、安心して子どもを授かり育てられるまちづくりや少子化の克服と共に、他の5つの分野における活動を支え、6つの分野間の循環をつくり出し、人口が減少してもいきいきと暮らせるまちをつくることを可能にする礎になります。

2 レジリエント・シティの実現に向けた取組

(1) 「リーディング事業」と「更なる取組の検討案」

本市では、既に、それぞれの分野別計画等の中で、危機や課題にしっかりと対応・克服するための各種施策・事業を推進しているところです。

そうした関係施策・事業のうち、レジリエンスの視点((P4～5参照。政策の融合, 市民との協働等。))から、他の取組を先導する役割が期待できるなど、特に重要な施策・事業を、本戦略において「リーディング事業」と位置付けます。

各リーディング事業に取り組むことが、都市のレジリエンスの向上にどのようにつながるのかについて「リーディング事業としての意義」として記載しています。

これらを先導的・象徴的な取組として重点的に推進することにより、リーディング事業以外の関係施策・事業等にもレジリエンスの視点が組み込まれていくことを目指します。

さらに、リーディング事業に加え、本市のレジリエンスの課題を踏まえて強みを伸ばすなど、本市のレジリエンスをより一層高めるうえで、効果的と考えられる取組の案(検討案)を掲げます。

これらの案については、今後さらに、「レジリエンスのための政策強化・融合等推進会議(仮称)」(第4章参照)等を通じて、内容の詳細や具体化の方策等について検討を進めます。



平成30年(2018年)7月4日 第1回「京都創生総合戦略・レジリエンス・SDGs」推進本部会議



平成30年(2018年)10月16日
レジリエンス戦略策定に向けたワークショップ

(2) リーディング事業

1 人が育つまち（人口減少・少子高齢化対策等）

目指すまちの姿

現在そして将来の担い手の育み，多様なひとの力の発揮，活躍の促進など，あらゆる取組を推進する基盤となる「人が育つまち」

主な課題

- 少子高齢化が進展する中で，死亡数が出生数を上回る自然減が拡大し，今後，中長期的にも続くと見込まれる人口減少
- 大学のまち・学生のまち京都で学んだ学生の東京圏への転出や，子育て世代の周辺都市への転出など，京都の将来の担い手となる層の市外流出
- 人口減少がもたらす経済成長の低迷や，労働力人口の減少，社会保障制度を支える現役世代の負担増，地域活動の担い手不足など，様々な分野への深刻な影響

【取組の方向性】

- ① レジリエント・シティの未来の担い手を，まちぐるみで育む取組の推進
- ② だれもがあらゆる場で活躍できるレジリエンスな社会環境の構築・整備
- ③ 京都で学び，働きたいという希望をかなえる移住・定住促進

～リーディング事業の一例～

「学校運営協議会」の取組

本市では，学校・家庭・地域が共に行動し，地域ぐるみで子どもを育むために，学校運営協議会を設置しています。

「京都方式」の学校運営協議会は，保護者や地域住民が「子どもたちのために汗をかく学校の応援団」として積極的に学校運営に参画し，学校と地域との協働活動を通して子どもたちに地域への愛着や地域の一員としての役割，人との絆の大切さを伝えるなど，将来の地域の担い手育成をとともに，地域の活性化にも寄与しています。



2 支え合い、助け合うまち（地域コミュニティ活性化等）

目指すまちの姿

町衆文化が受け継がれるなど、地域各々の歴史が息づくとともに、国籍や文化などの違いを超えたコミュニティとして賑わいや活力のある「支え合い、助け合うまち」

主な課題

- 人口減少や少子高齢化の進展，居住形態や生活様式の多様化による，地域コミュニティの活力の低下
- 防災や防犯，清掃・美化活動，高齢者の見守り等の福祉活動など，京都ならではの住民自治の伝統を受け継いで行われてきた様々な活動の存続の危機

【取組の方向性】

- ① 京都の住民自治の伝統や支え合いの精神が息づく地域力・市民力の更なる強化
- ② 地域社会の担い手不足解消等に向けた，地域活動やまちづくりへの多様な力の参加促進
- ③ 地域力・市民力を支える地域コミュニティの活性化や，健やかで安心安全な地域づくりのための，区役所・支所と関係団体・機関等の連携促進

～リーディング事業の一例～

「地域コミュニティ活性化」の取組

学区の自治連合会や自治会・町内会等が加入率向上や活性化，地域力の向上を目指して自主的に取り組む事業を助成等により応援しています。

地域の魅力や活動情報の発信，未加入の住民との交流イベントの開催，マンションでの自治会設立に向けた取組，地域課題に対応するため各種団体等が連携する仕組みづくりなどの取組が広く展開されています。



3 豊かに暮らせるまち（文化・芸術創生，経済・産業発展等）

目指すまちの姿

文化・芸術が次世代に継承され，更に発展するとともに，伝統と革新が融合しながら，経済成長の好循環が生まれる「豊かに暮らせるまち」

主な課題

- 本市の個性，魅力の源泉でもある多様で重層的な文化芸術の保全・継承を脅かす，少子高齢化等に伴う担い手不足，ライフスタイルの変化や価値観の多様化による需要の低下等
- 京都の発展の礎を築いてきた市内産業が直面する，競争環境の激化，担い手不足等

【取組の方向性】

- ① 京都ならではの文化によるレジリエンスの推進に向け，文化の持続可能性を高めるための担い手の育成や機運の醸成
- ② 文化と産業・観光との融合など，文化による経済の活性化等を図り，都市の持続可能性につなげる取組の推進
- ③ 伝統と革新が融合した，ものづくり都市・京都の知恵と強みを活かした成長戦略の推進

～リーディング事業の一例～

「まち・ひと・こころが織り成す京都遺産」の取組

文化遺産の新たな魅力を伝えるために，京都の文化遺産をテーマごとにまとめ，地域性，歴史性，物語性を持った集合体として認定し，京都の文化遺産の維持・継承・活用を図っています。

更に，この取組は，デジタルスタンプラリーの実施や外国人観光客のツアー作成に取り組むなど，観光資源への活用も進めています。



4 快適で安心安全なまち(景観・町並み保全・創生, 空き家活用促進, 防犯等)

目指すまちの姿

市民の暮らしの中で、京都ならではの景観・町並みが息づきながら、都市生活の環境が整った「快適で安心安全なまち」

主な課題

- 京都の町並み景観と生活文化の基盤である京町家の減失の進行
- 全世界の人々が訪れ、集い、交流するまちとなっていくうえで避けて通れない、観光と住民生活との調和や、観光客も含めた一層の安心安全確保
- 高齢化の進展や観光客の増加等を背景とした、誰にとっても快適な都市環境に対する需要の高まり

【取組の方向性】

- ① 京都ならではの景観・町並みや、良好な居住・生活環境等の持続可能性を高める総合的な対策の推進
- ② 人々のいのちと暮らしを守り、安心安全な生活環境を実現する取組の推進
- ③ あらゆる人々の安心安全を支える都市環境の創出・提供

～リーディング事業の一例～

「空き家対策」の取組

昔ながらの町並みが残る一方、高齢化が目立つ紫野学区。近隣の大学を巻き込み、自治会や地域住民によるまちづくり活動を継続して行ってきました。

その取組の一つとして、まちあるきで把握した空き家の一つを学生向けシェアハウスに活用。

ボランティアや地域の方の協力を得て改修し、地域と学生をつなぐ機会となりました。



5 環境にやさしいまち（地球温暖化対策等）

目指すまちの姿

自然と共生する中で磨き上げ、今も息づく環境への高い意識の下、市民ぐるみで進める保全と発展が調和した「環境にやさしいまち」

主な課題

- ・ 猛暑や度重なる豪雨など、地球温暖化が一因になっていると考えられる極端な気象現象の多発
- ・ 京都に様々な恵みをもたらしてきた三山の荒廃や、固有生物の減少・絶滅等、自然環境の保全や伝統文化の継承を揺るがす危機
- ・ 持続可能な循環型社会の実現に向けた、市民や事業者との協働による更なるごみ減量の取組の必要性

【取組の方向性】

- ① 環境先進都市としてのモデルとなる取組の推進と発信
～京都議定書誕生の地・京都の使命～
- ② 京都の暮らしや文化を支える、自然環境の保全に向けた取組の促進
- ③ 持続可能な社会を構築する担い手と環境にやさしい社会経済のしくみづくり

～リーディング事業の一例～

「環境にやさしいライフスタイル」の取組

「環境にいいことしていますか？」を意味する「DO YOU KYOTO？」を合言葉に、環境にやさしいライフスタイルへの転換に向けた取組を行い、市民・事業者と一丸となった地球温暖化対策を推進しています。

また、京都議定書の発効日にちなんで毎月16日を「DO YOU KYOTO？デー」として「ライトダウン」や「ノーマイカーデー」などの取組を実施しています。



6 災害に強いまち（防災・減災，テロ対策，インフラ老朽化対策等）

目指すまちの姿

社会インフラの適切な管理や防災まちづくりの推進に加え，市民一人一人の防災意識が更に高まることで，自助・共助・公助が整った安心安全で「災害に強いまち」

主な課題

- 都市機能が発達した中で危惧される，土砂災害や風水害，大地震などの自然災害被害の甚大化等
- 気候変動などの影響で頻発する大雨に対し，様々な取組を融合させた，「雨に強いまちづくり」の取組を推進する必要性
- 人口減少や少子高齢化，社会インフラの老朽化などによる慢性的な防災力の低下

【取組の方向性】

- ① 市民，企業等の知恵と力を活かした防災まちづくりの推進
- ② 地域力・市民力を活かした，防災・減災力の更なる向上
- ③ 災害発生時に，危機に陥ることなく都市機能を維持するための，強靱な社会インフラづくり

～リーディング事業の一例～

「消防団」の取組

京都市の消防団は，各行政区に設けられた11の消防団とおおむね学区単位に設けられた205の消防分団等をもって組織しています。

消防団は，消防局との力強い連携により，火災，震災等における警戒防御活動を行うとともに，市民の防火・防災に対する意識と対応力を高めるため，昼夜を分かたず活動しています。



その他のリーディング事業の内容は，「戦略本編」に掲載しています。

<https://www.city.kyoto.lg.jp/gyozai/page/0000248522.html>



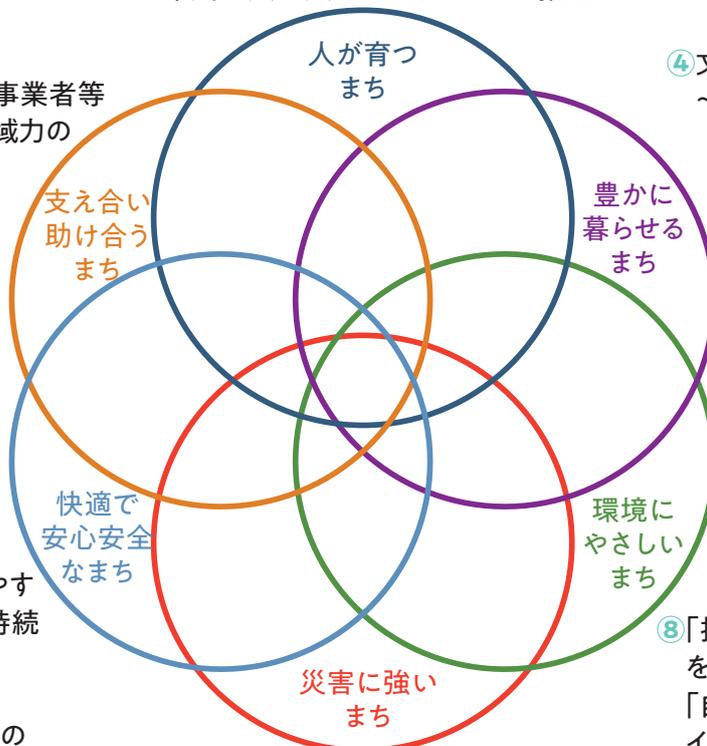
(3) 更なる取組の検討案

「レジリエンス」なまちであり続けるために、こんな取組を考えています。

① 少子化対策の更なる推進など、人口減少社会に挑戦する取組の充実・強化

② 人生100年時代のレジリエントな生き方や価値観の創造
～ 市民一人一人のレジリエンスの推進

③ 地域 × 大学・学生 × 事業者等の力の融合による、地域力の更なる強化



④ 文化によるレジリエンス
～ 世界文化自由都市・京都ならではのレジリエンスの推進

⑤ 地域と共に未来を切り拓く、危機に強い持続可能な京都経済の確立

⑥ 将来にわたって暮らしやすく、魅力と活力のある持続可能な都市の構築

⑧ 「持続可能な都市文明の構築を目指す京都宣言」で示した「自然との共生」「ライフスタイルの転換」「イノベーション」などの実践

⑦ 市民、京都府警察等との連携強化による、安心安全なまちづくりの更なる推進

⑨ 地震、豪雨、台風など近時相次ぐ自然災害等を踏まえた防災・減災対策や体制の強化、及び“自分ごと、みんなごとの災害対応”の促進等

具体的な内容は「戦略本編」に掲載しています。

<https://www.city.kyoto.lg.jp/gyozai/page/0000248522.html>



CROからのメッセージ

今さえ良ければ！自分さえ良ければ！からの脱却

レジリエンスの言葉の意味は幅広いですが、反対語を考えてみると、意外と理解していただき易いかも知れません。

つまり、「今さえ良ければ！」「自分さえ良ければ！」

物が豊かで便利な現代社会の落とし穴とも言うべき、こうした思い込みがレジリエンスの対極にあると言えるのではないのでしょうか。

第4章 戦略の推進方法等

1 市民等との協働，国内外の都市や関係機関等との連携による推進

(1) 市民，地域，企業，大学，NPO等との連携・協働

「“みんなごと”のまちづくり推進事業」をはじめ，あらゆる政策分野で市民協働，産学公連携など，市民，地域，企業，大学，NPO等との連携を促進することにより，市民等と行政が「ひとごと」ではなく，「自分ごと」，「みんなごと」として知恵と力を出し合い，レジリエント・シティの取組を推進します。

(2) 国，京都府，他の市町村等との連携

レジリエント・シティの取組を本市だけでなく，京都府下全体，更には関西，我が国全体に波及させていくことを視野に，京都府をはじめ，府内各市町村や周辺市町村，関西広域連合，指定都市市長会等との連携を一層深め，レジリエント・シティの普及・拡大を図ります。

(3) 海外都市等との連携や国際的都市間ネットワークの活用

「100のレジリエント・シティ」に選定された海外都市や，本市の姉妹都市・パートナーシティとの連携や情報共有を図りながら，本市の取組を広く世界に発信するとともに，先行事例を本市の取組に活かす等の取組を進めます。

2 本市の推進体制

(1) 「京都創生総合戦略・レジリエンス・SDGs」推進本部

推進本部（市長，副市長，CRO，全局・区長等により構成）のもと，全局・区役所等が主管局として，全庁挙げた取組を推進します。

(2) 「レジリエンスのための政策強化・融合等推進会議」（仮称）の設置

「レジリエンスの視点」の職員への普及，市民等との協働に向けた方策等の議論を進めるため，標記の「政策強化・融合等推進会議（仮称）」を設置します。

(3) 担い手育成

職員教育や行政分野を越えた職員の参加によるワークショップなどの方法により，「レジリエンスの視点」を職員に普及し，実践につなげるための取組を実施します。

3 進行管理

本戦略の取組の進ちょく状況等については、個々のリーディング事業の進ちょく状況を追うのではなく、「レジリエンスの視点」がどれだけ浸透し、政策の推進に反映されたかを把握することがより重要であるという観点から、上記1(1)の市民フォーラムの開催等による市民や有識者等の皆様からの御意見や、上記2の推進本部及び政策強化・融合等推進会議の議論等を通じて、適切かつ効果的に把握し、点検を行います。

この点検を踏まえ、関係部局等における新たな事業の実施、既存事業の充実・見直しなど、必要に応じて改善を行います。

CROからのメッセージ 身近なレジリエンス

戦略冊子を最後までお目通しいただき、ありがとうございます。

「レジリエンス」……聞き慣れない言葉ですが、皆さんの身近なところで思い当たる例は見つかりましたか？

- ショックな体験から立ち直って、ひと回り大きくなったような気がする。
- 骨折して、リハビリの後、気が付くと周囲の筋肉が逞しくなっていた。
- ゴルフでミスショットの後、上手くリカバリーできて、良いスコアで上がった。
- 会社が厳しい状況に直面して、逆に従業員の結束が固まった。

などなど

是非、まずは身近な場面で、「あー、今、レジリエンスを体感したな！」「うちの家庭のレジリエンスはどうだろう？」「ちょっと『レジ』ってみようか(笑)」

そんな思いを共有していただける方が、一人でも増えること、まさにそれがレジリエンスのある社会ではないでしょうか。

レジリエント・シティとは、「レジリエンスのある市民が集い、活躍し、育つまち！」でもあるのです！





写真提供：京都市メディア支援センター

発行：京都市行財政局防災危機管理室
平成 31 年 3 月発行 京都市印刷物 303255 号



この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！

